

二十一世紀に日本語作家として生きる——考えること、ことばにすること

報告 星野智幸

新聞記者を辞めてメキシコに行ったのは、自分の限界を壊したかったからでした。自分が日本の常識や考え方をしている部分は、自分では本当にはわかりません。日本語でものを考えているので、日本語の常識を当たり前のこととしています。でも違う言語、例えばスペイン語を日常の言語にしてみると、日本語では当たり前なことが当たり前ではなくなる。例えば「迷惑」。日本語では普通に使う言葉だし、人の行動をいつも制限する原理となっていています。ところが、メキシコのスペイン語では、人に迷惑かけるからやめなさい、みたいなニュアンスはありません。だからメキシコ人に、「迷惑」という言葉を使って、日本語にある禁止のニュアンスを伝えようとしても、伝わりません。「空気を読む」も同様。

そのようにして、メキシコの常識を体になじませ、スペイン語を日常言語にしていくと、頭の中が少しずつ組み変わっていきまします。日本で当然のことが、日本の一歩外に出ると当然ではないのだ、ということが、皮膚感覚で理解できるようになる。逆もまた然り。だから、どちらがいいということではないのです。重要なのは、自分が当然と思いついて入っていることも、他人には当然ではないことがたくさんある、という現実を、よく知ること。自分の外に出る、自分ではない立場の感じ方、常識、感情を知ろうとすること。考えることはそこから始まります。そして、それは文学の命

でもあります。

日本文学は日本人のもの、だとか、日本人なら日本語を使う、といった、言語とルーツを同一視したり自明視したりする考え方は、一九九〇年代に批判されました。ルーツや国籍が日本ではなくても、また、日本語のネイティブでなくても、日本語を駆使して文学を作っていく人たちが注目されてきたからです。それで「日本語文学」と呼ぶようになった。リービ英雄さんや多和田葉子さんが登場して、「越境の文学」ともてはやされました。この「越境」という表現、当初はそれまでの考え方の枠組みを壊す、意味のある言い方でした。でも、使われ続けていくうち、軽くなった。かれらが問題にしていたのは、境を超えていくことではなく、そこが境だとされていること自体だったからです。それは生き死にの問題です。誰がそれを「境」としているのか、誰がそれを「標準」としているのか、言語はその言語単位で境なのか。

ところが、ぼく自身の使う日本語は「標準語」です。ぼくは自分に故郷がないこと、土地の言葉を持たないことがずっとコンプレックスでした。祖父の代から東京の生まれ育ちなので、ネイティブの日本語はいわゆる標準語です。しかもアメリカで生まれ、帰国後も各地を転々として育っている。だから故郷、田舎という意識はどこにも持ってません。出身地や田舎の話をするのを極度に



恐れていました。自分はみんなと違うと見なされるから。

なので、ルーツと言葉を切り離す考え方が、自分を解放してくれたのです。でも解放されればされるほど、「標準語」で小説を書くことに戸惑いを感じました。自分にとってあまりに自然な言語で書くことは、文学ではないのではないか。自分が無意識に当たり前だと思っていることをあぶり出すような言語で書く必要がある。例えば、登場人物が誰かに対して「迷惑だ」と思ったとする。これをベタで書けば、作者にそういう価値観があるということになる。でも、書き手が意識して書けば、「迷惑だ」と感じる人物を設定して書いている、ということになります。「迷惑」という言葉と価値観は、相対化されたうえで使われたこととなります。

この相対化が文学には常に必要です。だから、標準語で書くと、ベタな部分だらけになっていきそうな気がした。それでぼくはデビューから十年ぐらいは、自然ではない、けれど自分の実感も失わない言語を意識して書くように努めました。具体的には、比喩の使い方です。人の無意識の価値観、人生観は、比喩に最もよく現れます。サッカーの例で言うと、かつてガンバ大阪に、エムボマというカメルーンのスター選手が入団、「浪速の黒豹」と呼ばれます。アフリカ系の選手は、えてして動物に例えられ、「身体能力が高い」という言い方をされます。では、やはり身体能力が高いポルトガルのスーパースター、クリスティアーノ・ロナウドは、「南海の白豹」とか言われるでしょうか。ぼくは定型にはまらない比喩で考えるように努めました。例えば、「ピッチで躍動する割けるチーズ、ロナウド」とか、「夕立の後の水溜りのように虹色に輝くエムボマのスーパースhoot」とか。

このように、一読してもイメージのつかみにくい表現で書かれた文章は、わかりにくいと言われます。それは当然で、まだ言語化されない言語を書いているわけだから。見たことのない言葉は、すぐにわかるはずはありません。書き手、読み手がそれぞれ、自分の立場や常識から一歩外に出で、理解しようとするのが、文学を読むということだと思います。

けれども、毎回、普通ではない比喩を使っていると、それが自分の中で自動化してきます。変わった比喩を半ば自動的に捻り出せるようになる。すると、文学から離れていきます。比喩のための比喩でしかないから。

このように、文学は、手垢にまみれて見慣れすぎて、意味が自動化してしまった言葉を、もう一度更新していくもの。リサイクルしていくもの。自動化した言葉でいくら語っても、自分の表現したいことには届きません。

文学のもう一つの役割は、毒を薬に変えることです。言葉は猛毒です。人の心を殺せる。この何年かは、ヘイトスピーチなど、自分の鬱憤を晴らすのに言葉を暴力として使うことが猛威を振るっています。言っているほうは、その瞬間はスカッとするが、すぐに、さらに強い暴言を吐かないと気が済まなくなります。とても依存性の強い毒。言われたほうは、はたから想像するよりもずっと深く傷つきます。例えば、ぼくがツイッターで「反日分子、出てけ」と言われたとする。すると、相手の毒が自分にも回って、暴力的な言葉を返したくなる。死ぬ、殺す、不要、みたいな言葉をじかに向けられた人の精神の壊され方は、もつと深いでしょう。これらは、言葉が持つ毒性を、悪用している例です。言葉や物語の暴力性を、自分のために乱用している。

けれど、文学はそれらの言葉を、暴力性を骨抜きにするために使います。例えば、ドストエフスキの『罪と罰』。ラスコーリニコフは、なんで自分ばかりこんな不当な目にあつて高利貸の婆さんなんかのさばっているんだ、あれが死んでその金が自分に投資されれば世の役に立つ、と考えます。これは、日本人である自分が不当にも負け組になつて、日本人じゃない奴らがいい目を見ている、こんな連中はいなくなつて、自分たち日本人に利益が還元されるべきだ、と主張するヘイトスピーチとそっくりです。でも、『罪と罰』を読んで、そうか自分も金持ちを殺すべきなんだ、と目覚める人は、ほほいしないでしょ。むしろ、そんな考え方が異様に思えるはずです。けれど、これが排外主義的な政治家など権力のある人間の言葉だったら、普段そんなことを考えてもいなかった人までもが大勢、人殺しに加担するようになつたりします。ナチスの歴史は、その最悪の実例です。

同じ言説なのに、片方は暴力を促し、文学は暴力を中和する。これが文学の言葉です。同じ毒を薬に変えてしまう。あらゆる文学はきれいなこと、言葉では描かれず、むしろ言葉や物語の暴力を積極的に使う。けれど、できあがった作品は、その負の力を弱めてしまうのです。

リレー講義 「世界文学に触れる」特別講演会
小説家デビュー二十周年記念！

星野智幸さんを迎えて

二〇一七年四月二十七日(木)